肢病専だより

宮城県特別支援教育研究会
肢体不自由病弱虚弱教育専門部

令和元年度１２月１３日発行　第２号　　（事務局：宮城県立船岡支援学校）

◆令和元年宮特研肢病専 会員研修会Ｂ 報告

１　開会行事 開会の挨拶　　宮城県立山元支援学校　校長　樋口美穂

〇夏休みも後半にさしかかった。夏休み明け，子供たちは様々な思いを抱えてくる。“学校”とは児童生徒にとって，「自分の話を聞いてくれる先生・友達がいる場所」「頑張る自分を認めてくれる場所」であり，元気や生きる力を与える場所であってほしい。アウトリーチ型学習支援も，限られた時間であってもとても意義をもつものである。

２　話題提供

「アウトリーチ型学習支援の取組について」

宮城県立西多賀支援学校　教諭　米山晶子先生

〇茨城県で行われた病連全国大会での発表したものであるとのこと。スライド資料に沿って説明していただいた。

〇アウトリーチ→手を伸ばすこと，対象者のいる場所に出向いて働き掛けること。

〇西多賀支援学校では，宮城県の病弱教育の課題から，「病弱支援学校としてできることをしよう」ということで，他の病院に入院する児童生徒への教育的支援として「アウトリーチ型学習支援」に取り組んでいる。

〇課題はあるが，子供たちの「学びたい」という気持ちに寄り添うことができている。支援者側の方にもメリットがある。

３　質疑応答

〇学校の中での共通理解が大事だと感じた。それ以上に，病棟スタッフとの連携はどのようにしているのか。

→年に２回(年度末・年度初め)反省会を行っている。あとは，その都度学習日終わりに反省を共有するようにしている。

〇保護者の反応などはどのような感じか。

→保護者と円満な家庭があまりない。保護者と関わるのは病棟の方である。ただ，病棟のスタッフから見てもらうと，この学習支援はとても良い機会だと捉えてもらっているようだ。保護者についてはあまり介入しないようにしたり，家庭の悩みなども話題にしないようにしたりしている。

４　施設見学(ありのまま舎)

〇Ａグループ，Ｂグループに分かれて概要説明を受け，施設見学を行った。

〇入居者の居住スペースであるユニットは３つに分かれており，「鳥の海」（青）・「いちごの里」（赤）・「四方の風」（緑）と亘理町にちなんだ名称とイメージカラーになっている。

〇地域生活支援拠点と地域包括ケアシステムを取り入れ，地域の方々のニーズに対応できるように，整備を行っている。建物の中に基幹相談支援センターがある。地域の相談支援の中核的な役割を担っている。現在は施設入所４名。亘理町の方々のニーズを聞いて進めている段階である。

５　質疑応答

〇どのようなスタッフがいるのか。→宿直３名，夜勤２名，管理者１名，その他看護師や調理員，栄養士，理学療法士が在籍している。

〇生活介護の活動内容はどのようなものか。→利用者と関わる中で活動内容を考えている段階である。音楽鑑賞を行うことがある。今後は外出なども取り入れていく予定である。

６　閉会行事 閉会の挨拶　　肢病専部事務局長　船岡支援学校教頭　千葉拓哉

◆令和元年度宮城県特別支援教育研究会「第６５回夏季研修会」肢病専部担当発表

「学校の特性を生かす～こどもが『この学校に来てよかった』
と思うような，忘れられない思い出を作ろうぜ！～」

宮城県立船岡支援学校　教諭　冨樫　裕一

私は「教師」とは「幸せ」を作り出す仕事だと思っています。今，この文章を読んでくださっている先生方の多くは，特別支援学校や特別支援学級の先生方だと思います。特別支援学校や特別支援学級の何がいいか。それは，「自分で決められること」「自分の好きなようにできる」ことなのではないでしょうか。普通学校の普通学級にいれば，自ずとやるべきことは決まってきます。でも，私たちは違います。せっかく「できる」環境にあるのだから，やりたいようにやってしまいましょう。みなさんは「できる」環境にあります。

特別な思い出をくれる学校や先生との出会いは，間違いなく子供たちの人生を豊かにするでしょう。ハンディを背負って生まれ，運命の糸に導かれてやってきた子供たちに，「むしろこれで得しちゃった！」と思わせる毎日を提供しましょう。仲間の先生たちに，「いい仕事ができた！」という充実感を感じてもらいましょう。

当日はここから実例を示して具体的な話に入ったのですが，今回は２ページ以内ということなので，項目だけ挙げておきます。興味がある方は直接私までご連絡ください。

〇「はなっぴー誕生」船岡支援学校の５０周年を記念して誕生した，学校の公認キャラクター・「はなっぴー」の話。（ゆるキャラコンテスト，着ぐるみ製作，うた「Ｈａｎａｐｐｙ－Ｈａｐｐｙ」，１２体のゆるキャラ集結，河北新報，ＯＨ！バンデス出演，ポスター，記念品，漫画，スタンプラリー，缶バッジ，各種作業作品，はなっぴー絵描きうた，アイドルグループ「あ

ざらし」，絵描きうたリレー，ステッカー，Ｔシャツ，ウェルカムドール，ストレッチマンゴールドとの共演，パペットはなっぴー，おともだちデザインコンテスト，はなっぴーマトリョーシカなど・・・）

○「拓桃スーパーロボット大戦」ルール：目隠しをした先生が，段ボールで作ったロボに入り，子供の声に従って戦う。相手の機体に付いている紙風船をつぶした方の勝ち。

・第１回大会～第４回大会のようすについて。

○拓桃の思い出～おばけやしき，夜の天体観測会，日食観察，生き物の飼育，運動会・手裏剣世界一決定戦

○「毎日の授業や行事」～「できない」ものをできるように，「分からない」ものなんてない，「好きなこと」「楽しいこと」「爆笑」「喜びあい」が子供を伸ばす。

・P-1 グランプリ～目隠ししてお互いの口にプリンを運び合う。

・筒ワングランプリ～それぞれが５本の長い筒を持ち，一番端の筒の端っこからハムスターを入れる。ハムスターを筒から筒へ渡し，そのタイムを競う。

・ヤギワングランプリ～本物のヤギを招聘，手製のサファリバスに分乗して会いに行く。釣り竿にそれぞれいろいろな野菜を付けてヤギを誘い，一番人気があった者が優勝。

・ハムスター釣り世界一決定戦～釣り竿の先の皿に２０種類のえさの中から３つ選び，上に置く。卓球台にハムスターを放ち，えさを食べたら１点，リールを回して卓球台のへりまでハムスターを連れてくることができたら５点。総合点数を競い合う。

・釣りキチ三平世界一決定戦～ビニールプールに川で捕ってきた魚やザリガニ，金魚を放ち，本物の釣りを楽しむ。

・デスやぶさめ～健康ロデオマシーンを台車に乗せ，それに乗って駆け抜け，「やぶさめ」を行う。

・ウエスタン西部一決定戦～カウボーイやネイティブアメリカンの衣装を着けて，ロデオマシーンに乗ってソフトガンで「ならずもの」の的を撃つ。団体戦で向かい合って撃ち合うパターンもある。

・裏日本シリーズ　楽天 VS 広島～卓球台で巨大な野球盤を作り，その年２位だった楽天と広島のユニフォームを着て試合を行う。スイッチ一つで動くピッチングマシン「昇平くん」，バッティングマシーン「オズマ」，声援＆ヤジマシーン「ヨゴティ」などを使うことで健常者も障害者も全く同等に試合ができる。

・五月人形日の本一決定戦，ハリーポッター魔法学校，カラオケ紅白，お絵かき選手権，VS 嵐キッキングスナイパーワールドカップ船岡大会，イングリッシュジェスチャーゲーム世界一決定戦，ババンガバンバン足湯世界一決定戦，船岡ハワイアンセンター，忍術修行中忍選抜試験，猿人間コンテスト，動物人間トントン相撲，節分桃太郎侍日の本一決定戦，光遊び，クラブに行こう，壁ドン世界一決定戦，バーチャル天体観測宇宙を知ろう，戦隊ポーカー世界一決定戦などなどの授業，教材教具を紹介。

その他に，「笑いの効能」，「明確化促進マシーン」，「子供が伸びれば保護者も変わる，全てがうまくいく」，「教科指導」，「生徒指導」といったことについてもお話しましたが字数の関係で割愛します。

最後に

決して自分が輝こうという欲を出してはいけません。周囲が輝くプロデューサーになりましょう。みんなの笑顔を引き出そうとした結果として，あなた自身の充実感・幸せが望まなくてもやってきます。みんなの笑顔を引き出せたとき，子供や保護者や同僚が幸せになり，変貌していくとき，あなたに大きな幸福感・充実感が訪れるでしょう。

ちょっとの努力，ちょっとの工夫で，子供たちの毎日は楽しいものになります。

「授業が楽しい」「もっとやりたい」「勉強って楽しい」「先生に喜んでもらいたい」と思った子供は，どんどん伸びていきます。その出会いが人生を変えることだってあるのでは。せっかく先生になったのだから，どうせやらなくちゃいけないのだから，自分も周囲も幸せになるようにやりましょう。無理？無理ではありません。今からでも大丈夫。本当にだめな，恥ずかしい教師だった私だってできるようになったのですから。

◆教室の窓から

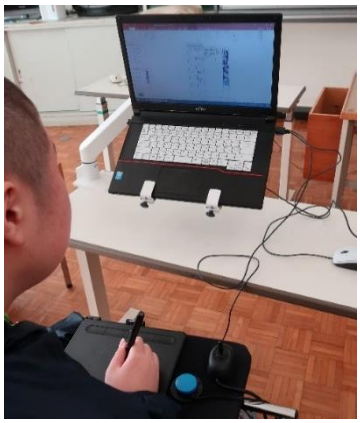
ＩＣＴからはじまる一歩

宮城県立西多賀支援学校　教諭　富田　勝利

本校は病気等により，医療や生活上の管理が必要な子供に対し医療と連携をし，必要な配慮を行いながら教育を行っています。

今回，紹介する生徒は，継続入院しながらも今後も学び，社会とつながりたいと考えている生徒の一人です。自立活動では，作業療法，理学療法の先生と相談しながら，身体に負担が少ない姿勢で学習するためにＩＣＴについて学びました。ＩＣＴは生徒の興味関心や社会とつながりを広めることもできます。ＩＣＴはスマートフォン，タブレット端末，パソコンなど様々のものがあります。作業療法士の助言で本生徒が活用するＩＣＴはペンタブレットとしました。ペンタブレットの利点は他の入力装置に比べ，軽量で多機能であることです。しかし操作には技術が必要です。専門的な作業療法の指導のもと，視線や体勢など身体に負担にならない操作に取り組みました。ペンタブレットの活用は，文字入力だけでなく，作画などの手書き入力やファンクション機能など，よりよい入力方法として多くの学習場面に生かすことができます。

こうした取組の中で，ペンタブレットを用いた学習が日常的になり，生徒は，より高度な技術に関心をもつようになってきました。高校生ながら，放送大学の「遠隔学習におけるパソコン活用」を科目履修し，ＩＣＴを用いた学習の理解を更に深める様子が見られるようになりました。おそらく今後の進路選択にも大きな影響を与えてくれることでしょう。



ＩＣＴでできることは，これからもどんどん増えていくと思います。めまぐるしい変化の中で，こうした技術を活用し，生活の中に生かすには，今後も医療との連携が必要となってくるでしょう。彼のペンタブレットが今後も多くの人たちと関わり，世界観を広げるスキルの一つとして役に立っていくことを期待しています。